

明治前期の出版広告にみられる中日交流

王 宝平

東京日日新聞は、明治5年（1872）3月29日（旧暦2月21日）に東京で最初に発行された日刊新聞である。創立者は戯作者として山々亭有人の筆名を持つ条野伝平（1832～1902）、貸本屋辻伝右衛門方の番頭であった西田伝助（1838～1910）、浮世絵師・歌川芳幾こと落合幾次郎（1833～1904）の3人で、程なくして西田と同じ辻家に奉公していた広岡幸助（1829～1918）が加わった。本新聞は当初から総合新聞を志向し、その後岸田吟香、福地櫻痴、徳富蘇峰といったメンバーを加え、大正・昭和初期には『東京朝日』とならんで二大紙時代を迎える。大正期には文芸欄も充実、森鷗外や芥川龍之介、菊池寛に横光利一などそうそうたる執筆陣が連載していた。

その間、1911（明治44）年に『東京日日新聞』の名を残すことを条件に経営的には『大阪毎日新聞』の傘下に。その後、1943（昭和18）年1月1日号から『大阪毎日新聞』と『東京日日新聞』が題号を統一し、『毎日新聞』となり、現在に至っている⁽¹⁾。

小論は、『東京日日新聞』創刊号から明治21年（光緒14年、1888）までの『東京日日新聞』に掲載された出版広告から、日本滞在歴を有する中国人との関連ある内容を抽出して、そこにみられる書物の文化交流の事情を研究しようとするものである。

なお、『東京日日新聞』掲載出版広告の調査に当たっては、国文学研究資料館開発の明治期出版広告データベースを全面的に利用した。本データベースは、近代日本の出版事情を探ることを目的として、明治初期の新聞・雑誌等に掲載された出版物の広告を集成したものである。主に対象としたのは東京日日新聞で、明治21年末までの約38,600件の広告を収めているとのことである。記して感謝の意を表したい。

明治期出版広告に現れる中国人は、中国人の著書と日本人の著書に登場している。そこで、以下の二つに分けて述べてみたい。

一 中国人の著書に現れた中国人

筆者の調査で、次の中国人が明治前期の出版広告所載の中国人の著書に現れている。以下、書名、冊（巻）数、編著者、刊行人、初掲載年月日という順で記しておく。

1. 日本雑事詩二冊、黄遵憲著、文芸堂、明治13年5月31日
2. 日本神字考二冊、沈文熒訳 園田弘輯、九春社、明治17年12月16日
3. 周易旧註十二卷、徐鼎述、徐承祖、明治19年1月17日
4. 普法戦記十四卷、張宗良口訳、王韜輯撰、瑞穂屋卯三郎、明治8年6月7日
5. 通俗普法戦記（天の部）、王韜編、相沢富蔵、明治21年4月10日
6. 扶桑游記三冊、王韜著、栗本鋤雲点、東京、報知社、明治12年12月15日
7. 瀛壖雜誌二冊、弢園尺牘本四冊、重訂西青散記四冊、艷史叢抄八冊、王韜著（編）、唐本、明治12年6月6日
8. 蘅華館詩録二卷、王韜著、石川鴻斎点、中市兵衛、明治14年6月7日

以上の図書の中国人は、黄遵憲、沈文熒、徐承祖、そして王韜の4人である。王韜以外はすべて一種の著書のみ。『日本雑事詩』は、明治時代初代日本駐在清国公使館参事官（光緒3年11月～6年10月）を務めた黄遵憲（1848～1905）が、明治日本の概略的な印象を詩にまとめた名著で、江戸時代以来の漢学の伝統を継承する明治漢文学者らの熱狂的な歓迎を受けた。本書は着任1年後の1878年の秋に起稿、草稿を改めること4回におよび、1879年の春に脱稿した。それを総理各国事務衙門に提出して、同じ年の冬に、直ちに同文館より官版として出版された。黄遵憲の『日本雑事詩』の自序によれば、本書は東京や京都で競って翻刻版が出たが、『東京日日新聞』の広告に見られたのは、東京にある文芸堂（早乙女要作）版のみである。共に明治13年（1880）の広告で、5月31日、6月2日、7月10日、9月22日、11月4日、とあわせて5回の広告が見られた。

◆ 1 - 1 明治13年5月31日

附録

清国黄遵憲著

日本雜事詩 唐製 全二冊 訓点付 定価金三十五錢

本書ハ有名ナル在日本清国参贊官遵憲ノ原著ニシテ毎詩其事由沿革ヲ附叙シ能ク我国古今ノ事情ヲ尽セリ故ニ特リ詩文ノ模範タルノミナラス又大ニ史学ニ益アル近頃必要ノ雅典トス右ハ不日出板ニ付江湖ノ諸君最寄ノ書肆ニテ購求一覽アルベシ

東京小川町八番地 書林文芸堂白

とある。『日本雜事詩』の出版予告である。本書は日本の古今の事情を尽くしているため、詩文の模範となるのみならず、史学にも裨益すると強調している。

『日本雜事詩』の出版後、文芸堂は改めてPRした。

◆ 1 - 2 明治 13 年 6 月 2 日

雜報

清国公使館の黄遵憲著日本雜事詩二冊を飯島有年氏が訓点して早乙女要作氏が出版したり（下略）

◆ 1 - 3 明治 13 年 7 月 10 日

附録

日本雜事詩 唐製全二冊 定価三十五錢

右ハ有名ナル清国黄公度日本ノコトヲ々々詩ニ作り之レニ毎詩古今ノ沿革ヲ附叙シタルモノナリ各地各書林へ差出置候間御購求一覽アルベシ

出版書肆

小川町八番地 文芸堂白

とある。そのうちの 1 - 2 の早乙女要作氏とは、つまり文芸堂の主で、飯島有年に訓点を依頼して、『日本雜事詩』を出した。飯島有年は、このほかに『忠経字解』（飯島有年解釈、文芸堂、明治 15 年）、『刑法訓解』（飯島有年著、長谷川展校、東京、錦学堂、明治 13 年）、『各国議會概覽』（飯島有年編、東京、新井秀徳、明治 11 年）、『東京市街案内：イロハ引』（飯島有年編、東京、飯島有年、明治 11 年）等の編著書がある。

文芸堂は、また他の図書と共に『日本雑事詩』を広告に出している。

◆ 1 - 4 明治 13 年 9 月 22 日

蔵板及大売捌書目ノ内広告

○仏国／法律提要 箕作大井両先生合訳

○日本雑事詩 清国黄遵憲著

(中略)

右各書肆ニ差出置候間御購求ヲ祈ル

小川町八番地 書肆 文芸堂

『日本雑事詩』の刊行後、たちまち日本で売れて、洛陽の紙価を高めたようである。

◆ 1 - 5 明治 13 年 11 月 4 日

日本雑事詩 全二冊 定三十五銭

右者清国黄遵憲先生ノ著ニテ啻ニ詩文ノ工ナルノミナラス附叙シタル文ノ読書家ニ有益ナルヲ以已ニ千部売切レタリ今尚千部ヲ増刷シテ各書肆ニ差出諸君購読シテ其妙ヲ知り玉ヘ

東京小川町八番地 文芸堂白

と 1000 部売り切れ、また 1000 部を増刷しているという。そして、『日本雑事詩』が日本で歓迎された理由として、本文の詩が工なるのみならず、詩の後に記された注釈も読者に有益であると挙げられている。

黄遵憲以外に、同じ時期（光緒 3 年 11 月～同 5 年）に外交官として赴任した沈文熒の著作も広告に見られる。それは『日本神字考』である。

本書は 2 巻、「対馬国占部阿比留中務所伝古文」「鶴岡八幡宮所蔵古文」から「三才字」「三輪社額」まで、漢字が伝来する以前に古代日本で使用されていたと称される日本固有の文字—神代文字を解釈する本である。沈文熒訳、弟沈文煒校、園田弘編、含章堂蔵版と記録され、発売は東京潤生舎、九春社で、明治 17 年の刊行。

◆ 2 明治 17 年 12 月 16 日

清人沈文熒訳 園田弘輯

○日本神字考 半紙摺全二冊 定価五十銭

右ハ我国上古ノ文辞其訓甚ダ希ナリ今清人沈文熒之ヲ解釈スル極メテ詳委一読

ノ下渙然氷解ス夫レ本邦古文ノ妙ト開国ノ古キ他ニ掲出スル等ヲ看ニ足ル博雅
ノ士必ズ坐右ニ具テ可ナリ

(中略)

東京三十間堀一丁目 吾妻新誌本局 九春社

また、第三代日本駐在公使徐承祖（光緒 10 年月～ 13 年 11 月駐在）の父の著書も広告に出ている。

◆ 3 明治 19 年 1 月 17 日

雑報

○遺書の上梓 清国公使徐承祖君の亡父なる徐鼎氏は頗る博学の人にて著書数多ある中に周易旧註といへる書は能く其の蘊奥を極めたるが未だ草案の俣なりしと此度徐公使が上梓して世に公にせらるゝ趣なり

と広告ではなく、「雑報」欄に報道されている記事である。徐鼎（1810～1862）、字彝舟、号亦才、江蘇六合の人。進士の出身で、福建延平府知府等を務める。著書に、『小腆紀年』『未灰斎文集』『読書雜記』等があり、『周易旧註』はその未刊の遺書で、息子徐承祖により公刊された。本書の見返しでは、「光緒丙戌刊／于扶桑使廨」と印刻される。光緒 12 年（丙戌、明治 19 年、1886）に在日本清国公使館で上梓されているため、すぐに新聞に報道されたことがわかる。中日双方が頻繁に情報交換を行っていることの証となろう。

以上、黄遵憲、沈文熒、徐承祖といった外交官の他に、文人としての王韜の著書も多数明治広告に見られた。王韜（1828～1897）、字は紫詮、仲弢を号とする。江蘇長州（現、呉県）の人。清末のジャーナリスト。彼は、張宗良とともにプロシア・フランスの間で 1870 年～1871 年に行われた戦争を諸史料から集めて⁽²⁾、『普法戦記』という本にまとめたことで、日本にもその名が伝わり、そして、陸軍文庫（明治 11 年）、大坂脩道館（明治 20 年）等の翻刻本があった。しかし、『東京日日新聞』の広告に見られたのは、明治 8 年（1875）の瑞穂屋卯三郎版と明治 21 年（1888）の相澤富蔵版である。

◆ 4 明治 8 年 6 月 7 日

普法戦紀ハ清国王韜ノ著ス所王韜ハ香港印務総局ノ長トシ兼テ英学ニ通ス近来

ノ名家タリ斯書普法啓衅ノ始ヨリ講和ノ末ニ至リ逐一詳載シテ遺ス所ナシ抑モ
普法興蹶ノ一大劇ハ欧州近時ノ一大戦場ニシテ王韜ノ大椽筆ヲ以テ之ヲ編輯ス
事新ニ文妙ニ読者ヲシテ神飛ヒ魄動キ殆ト寢食ヲ忘レシム実ニ近世有名ノ史乗
ナリ且夫法帝豪塵ノ慘普相養老ノ樂乱党ノ暴挙議院の輿論ニ至テハ欧州今日ノ
情実歴々指掌ニ在リテ論者ノ模範ト為スニ足ル今諸先生ニ請ヒ訓点ヲ施シテ世
ニ公ニセント欲ス如何セン全部六百葉分テ十四卷綴テ八冊之ヲ印刷スルノ資頗
ル巨大ナリ因テ天下ノ諸彦ニ謀リ千部ノ数ニ充タンコトヲ冀望ス諸彦若其大戦
ヲ机上ニ觀輿情ヲ枕頭ニ掬セント欲セバ其国県住処姓名部数ヲ詳記シ七月十五
日ヲ限り弊鋪ニ投示セラレンコトヲ請フ全部価一円九十六錢トス興工ノ始先ツ
一円ヲ請フ大率三ヶ月成功ヲ期ス期ニ至リ成本ヲ以テ残金ト交換セン但興工成
本トモ其日ニ先テ報告ス若千部ニ充タサレバ斯事行ハレ難シ因テ四方ノ諸君ニ
稟告スルコト爾リ 東京本町三丁目

月 日

瑞穂屋卯三郎

と長い広告である。「香港印務総局ノ長トシ、兼テ英学ニ通ス近来ノ名家タリ」と
される王韜は、「大椽筆ヲ以テ之ヲ編輯ス。事新ニ文妙ニ読者ヲシテ、神飛ヒ魄動キ、
殆ト寢食ヲ忘レシム、実ニ近世有名ノ史乗ナリ。且法帝豪塵ノ慘、普相養老ノ樂、
乱党ノ暴挙、議院の輿論ニ至テハ、欧州今日ノ情、実歴々指掌ニ在リテ、論者ノ模
範ト為スニ足ル」と、まず『普法戦記』の内容を極力讃えている。そのうえ、「全
部六百葉分テ、十四卷綴テ、八冊之ヲ印刷スルノ資、頗ル巨大ナリ。因テ天下ノ諸
彦ニ謀リ、千部ノ数ニ充タンコトヲ冀望」し、「全部価一円九十六錢トス。興工ノ始、
先ツ一円ヲ請フ。大率三ヶ月成功ヲ期ス」と600葉、14巻にわたり、一円九十六
錢の高価な図書なので、まず1円の前金を募り、3ヶ月後に手交するという広告で
ある。

その後、本書の広告が現れたのは、13年後のことである。相沢富蔵訳、太田武
和閣とされる東京厚生堂の出版である。但し、天の部一冊のみ。

◆5 明治21年4月11日

特別広告

通俗 普法戦記 天ノ部一冊

右諸君御渴望ノ処漸く刻成り発売ス但予約諸君へハ本日ヨリ遞送可仕候

東京神田美土代町二丁目一番地

明治二十一年四月八日 相澤富藏⁽³⁾

とある。「諸君御渴望ノ処、漸く刻成り発売ス」という言葉は、宣伝の嫌いはないことはないが、明治 21 年（1888）になっても、『普法戦記』はなお日本で人気が落ちないことを物語っている。

王韜は『普法戦記』等によって日本でも名声を獲得し⁽⁴⁾、明治 12 年（1879）旧 3 月～7 月、日本の新聞社、漢文学者の要請で、香港の循環日報の主宰として来日した。来日中に記したのが、『扶桑游記』である。本書は栗本鋤雲が訓点をつけ、報知社が明治 12 年 12 月から 13 年 9 月にかけて出版。栗本鋤雲（1822～1897）、名は鯤、^{ほうあん}匏庵を号とする。新聞記者、郵便報知新聞の主筆、王韜を招聘した主要な人物である。本書には、王韜（上巻）、重野安繹（中巻）、中村敬宇（下巻）の序文と、亀谷行（上巻）、西尾為忠（中巻）、岡千仞（下巻）の跋文をそれぞれ飾っている。王韜は『普法戦記』で日本まで名を馳せたなら、『扶桑游記』により日本での知名度を頂点にまで高めたといえるかもしれない。

『東京日日新聞』に本書の広告を載せたのは、明治 12 年（1879）12 月 15 日（扶桑游記上）、12 月 22 日（扶桑游記上）、12 月 24 日（扶桑游記上）、明治 13 年（1880）11 月 20 日（扶桑游記下）と計 4 回で、広告主はみな書肆報知社支店である。

◆ 6 - 1 明治 12 年 12 月 15 日

清国王紫詮著

栗本鋤雲訓点

扶桑游記 三冊 本月十五日上冊一本出来跡中下二本共引続刊行

右は先生皇国に遊はれし初より帰国迄の日記にして山川佳勝は固より日々接する所の名家大人と応酬の詩文筆談等挙て泄す無れは特り先生文詩の雄健を見る而已ならず漢文を以我か風俗を写すの妙を知る可き書也

十二月

発兌書肆

東京薬研堀町三十三番地 報知社支店

と『扶桑游記』上中下3冊のうち、上巻完成の広告である。王韜の文詩の雄健を見るのみならず、漢文で日本の風俗を記す妙を知るべき本でもある、という。

『東京日日新聞』では、その後も下記のように相似した広告を続けている。(下線、引用者がつけた。)

◆ 6 - 2 明治 12 年 12 月 22 日

雑報

○此ほど発兌せし関義臣氏編纂の経史論存（十五冊）は仁斎徂徠以前の諸家山陽一斎以後の諸儒に至るまで経史に渉る論文を纂めたる者なり。王紫詮著の扶桑游記上一冊は同子が日本に遊びしより帰国までの日記にて応酬の詩文筆談等までを載せり。

◆ 6 - 3 明治 12 年 12 月 24 日

清国王紫詮著

栗本鋤雲訓点

扶桑游記 三冊 本月十五日上冊一本出来跡中下二本共引続刊行

右は先生皇国に遊はれし初より帰国迄の日記にして山川佳勝は固より日々接する所の名家大人と応酬の詩文筆談等挙て泄す無れは特り先生文詩の雅健を見る而已ならず漢文を以我か風俗を写すの妙を知る可き書也

十二月

発兌書肆

東京薬研堀町三十三番地 報知社支店

発売

東京通三丁目 丸屋善七

同 通二丁目 稲田佐兵衛

同 芝三島町 山中市兵衛

同 浅草茅町 北沢伊八

同 本石町 江島喜兵衛

大坂道修町 報知社支局

◆ 6 - 4 明治 13 年 11 月 20 日

清国王紫詮著

栗本鋤雲訓点

扶桑游記 三冊全出版

右は先生昨年中皇国に遊はれし初より帰国迄の日記にして山川佳勝は固より日々接する所の名家大人と応酬の詩文筆談等挙て泄す無れは特り先生文詩の雄健を見る而已ならず漢文を以我か風俗を写すの妙を知る可き書か曩に上中二巻發兌し今回下巻を出版し全備に至り候間御購覧奉希候

十月

發兌書肆

東京薬研堀町三十三番地 報知社支店

発売

東京通三丁目 丸屋善七

同 通二丁目 稲田佐兵衛

同 芝三島町 山中市兵衛

同 浅草茅町 北沢伊八

同 本石町 江島喜兵衛

大坂道修町 報知社支局

と6-2は合同広告で、6-4は下巻完成の広告である。

王韜の来日により、東京の漢文学界では、王韜の旋風を巻き起こした。東京到着に先立って、その声名が伝わり、到着後は大歓迎を受けた⁽⁵⁾。『扶桑游記』を読む限り、彼を訪ねてきた文人は後を絶たなかった。そして、彼もこのまたとないチャンスを生かして、自分の著書の販売を日本人に委託した。

◆7 明治12年6月6日

瀛壖雑誌

弢園尺牘本王紫詮 著

重訂西青散記

豔史叢抄王紫詮輯

王紫詮先生が刊行著書の敝社にて販鬻する標目は広告したる普法戦記八冊瀛壖

雑誌二冊（上海の風土名物を誌せし者）弢園尺牘本四冊（小品文中に往々時事を痛慨されたり）重訂西青散記四冊（風流才子必読の雅書なり）の外猶ほ此度艷史叢抄八冊の一部を増たり此叢抄は光緒四年の新編にして中に収むる所は則ち

○余澹心の板橋雜記○西溪山人の呉門画舫録○許養和の白門新柳記○珠泉居士の雪鴻小記○棒花生の秦淮画舫録○二石生の十洲春語○芬陀利行者の竹西花事小録○箇中生の呉門画舫続録○珠泉居士の続板橋雜記

右の外に自著の海陬冶遊録と花国劇談を併せし者にて先生久しく江湖に放浪すると雖も志を屈せず風流自在なるを見るに珍書なり

但此内治遊録は二冊の単行本もあり

六月

薬研堀町三十三番地 報知社支店

とある。以上の広告で触れた王韜の著書は、普法戦記八冊、瀛壖雜誌二冊、弢園尺牘本四冊、重訂西青散記四冊、艷史叢抄八冊である。そして、すべて王韜は報知社で委託販売しているので、和刻本ではなく唐本である。そのうちの『艷史叢抄』は、王韜が来日前の年—光緒4年（明治11年、1878）に新しく編集出版した叢書である。広告に基づき記せば、下記の11種が含まれる⁽⁶⁾。

板橋雜記三卷 清余懷撰

呉門画舫録一卷 清西溪山人撰

白門新柳記一卷 補記一卷 附記一卷 清嬾雲山人撰 清楊亨撰補記

雪鴻小記一卷 補遺一卷 清珠泉居士撰

秦淮画舫録二卷 清棒花生撰

十洲春語二卷 清二石生撰

竹西花事小録一卷 清芬利它行者撰

呉門画舫続録三卷 清箇中生撰

続板橋雜記三卷 清珠泉居士撰

海陬冶遊録三卷 附録三卷 余録一卷 清王韜撰

花国劇談二卷 清王韜撰

王韜の著書は、上記以外に『蘅華館詩録』も広告に出ている。これは王韜が編集した詩集で、石川鴻斎が訓点をつけ、東京中市兵衛が明治 14 年（1881）2 月に刊行した本である。

◆ 8 明治 14 年 6 月 7 日

清国王紫銓先生著 日本石川鴻斎訓点

蘅華館詩録 二巻 定価金七十五銭

方今清国ニ於テ王紫銓先生ヲ以テ。詩文ノ臣擘ト為ス。此書初メ日本諸名家贈答ノ詩ヲ録シ。後ニ先生ノ作長短五百四十余首ヲ載ス。寄忖清新句々人ヲ驚カシ。能古人ノ言ザル所ヲ言フ。苟モ詩ニ志シアル諸君。坐傍欠クヘカラザル書也。 東京芝三島町 山中市兵衛

とあり、王韜を清国の詩文の^{きよはく}臣擘と称え、作った漢詩は清新で、人を驚かし、よく古人の言わざるところを言う、という。これと同一内容の広告は、同 6 月 8 日付けと同 6 月 9 日付けの新聞にも 2 回ほど連日掲載されている。

二 日本人の著書に現れた中国人

明治期出版広告で、中国人の著書以外に、多数の日本人の著書にも中国人が登場している。筆者の調査では、32 件の出版広告に中国人の姿が見えている。逐一紹介する余裕もなく、詳細は付録「明治期日本人の著書広告所載の中国人」を参照されたいが、この付録から下記のようなことが言えよう。

まず、中国人の広告所載数。本課題の調査は、創刊号明治 5 年から明治 21 年までとしているが、調査結果では、中国人の日本人の著書に登場したケースは、明治 10 年代以前にも明治 20 年代にもなく、明治 10 年代に集中していることが浮き彫りにされた。しかも、表一に示した通り、明治 14 年、16 年が最多の 6 件で、17 年以降は徐々に減少していく傾向が見られた。

表一：中国人の明治期広告所載数

年代（明治）	11 年	12 年	13 年	14 年	15 年	16 年	17 年	18 年	19 年
広告数	3	4	3	6	3	6	4	2	1

次に広告の内容。大半は中国人が日本人の著書のために、序跋、題辞、批評を書き、原稿を校閲する中身であるが、10番のように清国人に教わり、12番、14番、16番、20番、21番のように、中国人から好評を得たことを強調している広告もある。学術交流の意味も存するかもしれないが、本番の中国からお墨付きをもらっていることを見せることによって、本書の社会的・経済的な波及効果を狙うモチーフも否めないであろう。

第三に、中国人所載数上位の図書。付録所載の図書で、石川鴻斎の図書に中国人が一番多く登場していることが明白である。1番の『芝山一笑』から14番の『書法詳論』まで、3分の一強を占めている。

石川鴻斎（1833～1918）、明治時代の漢学者、画家。本名は英、字は君華、通称は英助。鴻斎、芝山外史等を号とする。三河国豊橋の商家に生まれ、藩の儒学者西岡翠園等に師事して漢学を学ぶ。1877年（明治10年）東京に転居。同じ三河出身の和泉屋市兵衛が経営する書店に勤め、編集に携わる。また、芝増上寺の浄土宗学校の開校に際し、漢学の教師に就任。同年、清国の初代公使何如璋らが赴任したばかりの頃、僧2名を率いて、宿所として臨時滞在中の増上寺へ訪ねに行く。それが日本駐在清国外交官との交わりの濫觴を成す⁽⁷⁾。翌1878年、東京文昇堂より清国外交官との書簡や漢詩を収録した詩文集『芝山一笑』が刊行され、漢学者としての名声がますます高まる。

最後に、中国人登場者。大きく言えば、外交官と文人に分けられる。初代日本駐在（1877年11月～1880年10月）外交官として登場した人物に、何如璋、張斯桂（魯生）、黄遵憲（公度）、沈文熒（梅史）、廖錫恩、黄錫銓（鈞選）が現れ、二代（1881年12月～1884年8月）外交官として日本に駐在した人物に、黎庶昌、楊守敬、姚文棟、黎汝謙、黄超曾、方濬益、江景桂、杜紹棠が存在した⁽⁸⁾。そして、文人として日本に渡った人物に、王治本（黍園）、王藩清、王寅（冶梅）⁽⁹⁾、王韜（紫詮）、張滋昉⁽¹⁰⁾、周其照⁽¹¹⁾が挙げられる。

上記20人のうち、初代公使何如璋と随員沈文熒が最多で、共に12回登場。次席は王治本の8回、その次は黄遵憲5回、黎庶昌・張斯桂・黄錫銓4回、黎汝謙3回、姚文棟・王韜2回、残り1回というランキングである。

三 結び

以上、明治期出版広告に現れた中国人やその著書について考察してきた。拙論の第一部では、黄遵憲、沈文熒、徐承祖、王韜の著書が広告に現れ、第二部では、32 件の図書広告に、20 名の中国人の姿が見えていることが浮き彫りにされた。約 38,600 件に上る国文学研究資料館開発の明治期出版広告データベースの現在の登録データ件数に比較すれば、これは微々たる数字にすぎないかもしれないが、明治 20 年代になれば、中日関係が尖鋭化の一途を辿り、中国人が日本人のために序跋や題辞を書くケースが著しく減少した史実を考え合わせると、これらの微々たるもののように見える数字は、歴史の真相を象徴しているように思われる。

維新後の日本社会は、脱亜入欧の道を歩み始めたが、江戸時代の中国趣味流行が尾を引いており、中国文化や漢文学に対する嗜好は、依然として強靱に残っている。それに本物の中国の知識人が来日したので、彼らに序跋や題辞を書いてもらうのを光榮に思い、文壇でかなりはやっていた。このような時代の躍動が出版広告にもリアルに投影されているのが今回の調査で裏付けられたと思う。

付録：明治期日本人の著書広告所載の中国人

1. 芝山一笑一卷、石川鴻斎編、明治 11 年 11 月 13 日
茲書ハ鴻斎石川先生、清国公使欽差大臣何如璋、同副使張斯桂、其他諸隨員ト筆談清話ノ余、席上相贈答スル所ノ詩文ニテ。序文ハ沈文熒、王漆園等。
備考：沈文熒・王治本序、何如璋題書名、藩任邦挿図、王治本・沈文熒・黃遵憲・廖錫恩評。何如璋・張斯桂・沈文熒・黃遵憲・劉壽鏗・廖錫恩・潘任邦・何定求・王治本・王藩清等 10 名清人と著者との往来詩文を収む。
2. 纂評箋註蒙求校本三卷、石川鴻斎編、明治 12 年 11 月 26 日
清人沈文熒ノ檢閲ヲ乞ヒ。
備考：何如璋・黃遵憲・沈文熒序、何如璋校閱、沈文熒合評。
3. 日本文章軌範三冊、石川鴻斎編、明治 13 年 3 月 18 日
清欽差大臣何如璋校閱、姚江沈文熒、嶺南黃遵憲合評。
備考：王治本題書名、何如璋・黃遵憲・沈文熒序、何如璋閱、沈文熒・黃遵憲評。
4. 続日本文章軌範三卷、石川鴻斎編、明治 15 年 11 月 21 日
清欽差大臣何如璋閱、沈文熒・王治本・黃錫銓合評。
備考：王治本序、王仁爵書。
5. 日本八大家文読本四冊、石川鴻斎編、明治 16 年 4 月 20 日
清欽差大臣黎庶昌閱並序、同沈文熒、黃遵憲、黃錫銓、姚文棟、黎汝謙合評。
備考：黎庶昌閱並序、沈文熒・黃遵憲・黃錫銓・姚文棟・黎汝謙合評。
6. 校正円機活法二十冊、石川鴻斎校正、明治 16 年 4 月 9 日
大日本大沼枕山 大清沈文熒両先生校並ニ題辭。
備考：沈文熒・方濬益題辭。
7. 点註十八史略校本七冊、石川鴻斎先生補訂、山中市兵衛、明治 16 年 6 月 26 日
右は是迄行はるゝ者と異なりて今回石川先生の補訂を乞ひ鼈頭には先生初め日清数十余名家の評論を標記したれば一読以て唐土歴代の沿革を知り併て諸名家史論の一斑を窺ふに足らん。

備考：姚文棟校訂。

8. 増補日本外史十二冊、石川鴻斎編、明治 16 年 11 月 10 日
清欽差大臣黎庶昌閱並序、同沈文熒、黃遵憲、黃錫銓、姚文棟、黎汝謙合評。
備考：黎庶昌閱並序、沈文熒・黃遵憲・黃錫銓・姚文棟・黎汝謙合評。
9. 纂評精註唐宋八家文読本三十卷、石川鴻斎校註、明治 17 年 6 月 3 日
清国欽差大臣黎庶昌君序。
備考：黎庶昌序。
10. 文法詳論二冊 石川鴻斎著、明治 17 年 9 月 1 日
清国前公使翰林学士何如璋及ヒ沈文熒ヨリ親シク口授スル所ナリ。
備考：杜紹棠序。
11. 和漢合璧文章軌範四冊、石川鴻斎編、明治 17 年 10 月 15 日
斯編ハ（中略）日清諸家の評語批点を附し。
備考：黃遵憲・黃錫銓・沈文熒・王治本・何如璋・姚文棟評。
12. 文法詳論続篇二冊、石川鴻斎著、明治 17 年 12 月 16 日
当今来遊ノ支那人モ殊ニ其精微ニ服シ。
備考：黎庶昌題辭。
13. 蒙文詳解鳳文会玉篇大全、石川鴻斎編、明治 18 年 5 月 11 日
清国公使黎庶昌氏玉篇ノ遺漏ヲ集メ一書ヲ刊ス其他諸家ニ秘スル所ヲ写録シテ之ヲ蔵セリ因テ其書ヲ請求シテ悉ク之ヲ載セ。
14. 書法詳論二冊、石川鴻斎著、明治 18 年 8 月 8 日
清人方濬益周其照江景桂黃超曾ノ徒皆感賞シテ尽ク評語ヲ書シ異地同心ノ喜ヒヲ述べ執筆最上乘ノ法ト為ス。
備考：姚文棟序、原機書。
15. 点註唐宋八家文読本、清沈德潜評点、川上広樹点註、明治 11 年 9 月 5 日
該書ハ大清欽差大臣何如璋ノ披閱ヲ經テ序文ヲ卷端ニ掲ケ。
備考：何如璋序。
16. 三音四声字貫十六冊、高井思明編纂、市川清流校正、明治 11 年 9 月 25 日
現ニ我ニ駐在スル清国欽差大臣何如璋氏及ヒ王黍園氏ノ序言以テ証スベシ。

備考：何如璋・王治本序、王藩清書。

17. 棧雲峽雨日記並詩草三冊、竹添井々著、明治12年3月29日

序題辭跋評（中略）清国李中堂、曾湘卿候、俞氏、高氏、季氏、楊氏、方氏、齊氏、于氏、吳氏、程氏、蔡氏、葛氏、劉氏、毛氏、薛氏、鍾氏、強氏、徐氏。

備考：李鴻章・俞樾序、錢徵・俞樾評、高心夔・楊峴・強汝詢・李鴻裔・吳大廷・齊學裘、薛福成・曾紀沢卷末識語、方德驥跋、高心夔・俞樾評、楊峴・吳大廷・雪門氏・劉瑞芬・李鴻裔・高心夔・徐慶銓卷末識語。

18. 清文一斑一冊、（鈴木重義編）、明治12年4月5日

曾國藩李鴻章俞樾王紫詮沈文熒等近世諸家ノ雄篇大作ヲ録ス。

19. 日本名家經史論存十五冊、関義臣編、明治12年11月24日

清何如璋、張魯生、黃公度、沈文熒、廖錫恩、王黍園、王藩清、各先生評点。

清王紫詮先生、松平春嶽公題詞、副島種臣公題詩、清何如璋、張斯桂兩公使、沈梅史先生、中村敬宇先生等序、三島中洲先生、清王黍園先生跋。

備考：王藩清題書名、王韜題辭、張斯桂・何如璋・沈文熒序、何如璋・張斯桂・王治本・王藩清・沈文熒・黃遵憲・廖錫恩評、王治本跋。

20. 日本全史十冊、龍洲高谷著、明治13年1月9日

清国欽差大臣何如璋嘗テ先生ノ著ス所ノ万国公法蠡管ヲ評シテ曰ク註文ハ本文ニ愈ルト是ニ因テ之ヲ觀レバ。

21. 彤管生輝帖二卷、跡見花蹊編、明治13年4月20日

該書ハ跡見学校主花蹊先生清国公使ノ始テ我邦ニ至ル時妙齡ノ女弟子六名ヲ携テ公使館ヲ訪レ各書画揮灑セシヲ公使何如璋始メ皆々手ヲ拊ケ欽賞シー々詩ヲ賦シ贈ラル、ヲ。

備考：黃遵憲、何如璋贊、張斯桂序、何如璋・張斯桂・沈文熒・王治本詩、沈文熒・黃遵憲詞、廖錫恩題識。

22. 明治名家詩選三冊、城井錦原修纂、村上仏山校閱、明治14年1月14日

清国黃遵憲氏序

備考：黃遵憲序。

23. 詩文詳解、成章社、明治14年3月7日

詩文詳解第十集（三月五日発行）目次 飲醍醐 張斯桂（清人）。

24. 古今小品文集四冊、阿部貞編、明治 14 年 4 月 27 日

○石川鴻斎○王漆園○沈文熒○黃鈞選○各先生評。

備考：黃錫銓序、王治本・沈文熒・黃錫銓評。

25. 賞心贅録四冊、江馬天江著、明治 14 年 11 月 28 日

竹雲香谷治梅ノ三巨手ヲ倩テ其意ヲ画セシメシ。

備考：陳鴻誥評、陳鴻誥識語、衛鏄生・葉煒・陳鴻誥題書名、王寅絵畫並題詩、葉煒跋。

26. 周清外史二十二卷、馬杉繫著、明治 14 年 9 月 22 日

王治本先生閱。

備考：王治本校対。

27. 近史偶論二冊、大野太衛著、明治 14 年 11 月 4 日

清国泰園王治本先生序。

備考：王治本序。

28. 開化詩集一冊、（石川義暢編）、以文会社、明治 15 年 7 月 25 日

清国学士王治本批評。

29. 資行伝正編六冊後編二冊、石川義形著述、同利之校訂、明治 15 年 7 月 25 日

清国欽差大臣何如璋題字。

30. 本朝言行録四冊、石川義形著、明治 16 年 1 月 29 日

清国欽差大臣何如璋題辭。

31. 文明新誌第二号、文明新誌社、明治 16 年 7 月 28 日

大清欽差大臣黎庶昌題辭。

32. 明治字典四十冊、小杉楹邨ほか編、明治 19 年 12 月 28 日

清人楊守敬、張滋昉先生跋。

備考： 広告掲載書名、編著者、初掲載年月日、中国人関係の広告抜粋という順に
排列。また、備考とは、筆者が実物の図書で確認した中国人関係の書誌情
報である。

注

- (1) 以上、ホームページ「早稲田大学図書館所蔵貴重資料」東京日日新聞項目を参考にした。
- (2) 「余撫拾其前後戰事、彙為一書、凡十有四卷。大抵取資於日報者十之三、為張君芝軒所口訳者十之四五、網羅搜采得自他處者十之二三。」王韜「序」、1871年付け、『普法戦記』巻頭所収。
- (3) 本書については、国会図書館では下記の蔵本がある。普法戦記、張宗良（芝軒）著、王韜編、相沢富蔵訳、太田武和閲、東京、厚生堂、明21、3冊（天74,106,地417,人407p）。
- (4) 「匏庵曰：吾聞有弢園王先生者。今寓粵東。學博而材偉。足跡殆遍海外。曾讀其普法戦記。行文雄奇。其人可想。若能漂然來遊。願為東道主。」龜谷行「扶桑游記跋」、明治12年11月付。『扶桑游記』上巻所収、明治12年12月出版。
- (5) 「其身未至而大名先聞。既至而傾動都邑。如先生之盛者。未之有也。抑先生博學廣材。通當世之務。足跡遍海外。能知宇宙大局。遊囊所掛。宜其人々影附而響從也。」中村敬宇「扶桑游記序」、明治壬辰（ママ、25年）8月付。『扶桑游記』下巻所収、明治12年12月出版。
- (6) 北京中国国家図書館蔵『艷史叢鈔』には、画舫余譚一卷（清捧花生撰）があり、合わせて12種。
- (7) 『芝山一笑』巻首「清澤秀誌」による。
- (8) 明治時代の日本駐在清国外交官については、拙著『清代中日学術交流の研究』第三章「明治時代における日本駐在の清国外交官」（東京、汲古書院、2005年）をご参照。
- (9) 王藩清、王寅等の文人については、次の拙稿を参照されたい。「明治前期に來日した中国文人考」、『二松学舎大学東洋学研究所集刊』第34集、2004年3月。
- (10) 張滋昉については、次の拙稿を参照されたい。「明治時代に來日した文人張滋昉の基礎的研究」、関西大学アジア文化交流研究センター『アジア文化交流研究』第4号、2009年3月。
- (11) 周其照は原名英、字は寿陔、別号疎庵、上海青浦県出身、増貢生、書道家、絵も巧み。2代目公使黎庶昌の時代に日本に渡り、書画を多くの日本人に求められたという。『青浦県続志』附編「周其照」条、4ページ。1934年刊行、台北：成文出版社1975年復刻版。

付記：小論の広告を原文と校閲する際に、董科様大変お世話になった。記して感謝の意を表したい。

【キーワード】

・東京日日新聞 ・出版広告 ・著書 ・中国人 ・外交官